

二〇二四年度

日本近世文学会秋季大会

- ・大会プログラム
- ・研究発表要旨
- ・シンポジウム概要

期日 十一月十六日(土)・十七日(日)・十八日(月)
会場 佛敎大学紫野キャンパス1号館

〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町九六

日本近世文学会秋季大会のご案内

会員の皆様にはますますご清栄のことと存じます。

二〇二四年度秋季大会を開催いたしますので、ご案内申し上げます。

左記の案内と学会ホームページに掲載の大会案内とをご確認いただき、お申し込みください。

記

◆参加の手続き

・参加の申し込みと参加費・懇親会費の支払いは、Peatixまたは郵便振替をご利用ください。

【Peatixでの申し込み・支払い】

URLまたはQRコードからアクセスしてください。

URL <https://2024-autumn.peatix.com>

【郵便振替での申し込み・支払い】

郵便局備え付けの振替用紙に金額の内訳を明記してお支払いください。

振替番号・加入者名 〇〇一六〇一〇一〇二八一三 日本近世文学会

・参加費は一五〇〇円、懇親会費は一般七〇〇円・大学院生三〇〇〇円です。

・申し込みと支払いの締切は十月二十四日（木曜）です。Peatixでの申し込みは同日十三時締切です。

◆領収書・出張依頼状

・学会印の入った領収書が必要な方は、学会事務局へご連絡ください。Peatixをご利用の場合、システム上で領収書の発行が可能です。

・出張依頼状が必要な方は、氏名・職名・提出先・出張期間を明記し、学会事務局へご連絡ください。

◆大会当日について

・対面形式で開催します。オンライン中継はありません。



- ・会場受付で資料集をお渡しします。不参加の方への資料集の郵送はいたしません。
- ・会場受付で託児料金補助申請書を配付します。必要な方はお受け取りください。
- ・大会二日目の昼食の用意はありません。会場周辺の飲食店に関する地図を会場で配布します。
- ・大会三日目の文学実地踏査は、会場にて資料を配付しますので、各自・各グループでお回りください。

日本近世文学会秋季大会会場校代表 浜田 泰彦（佛敎大学）

メールアドレス y-hanada@bukyo-u.ac.jp

日本近世文学会秋季大会実行組織

大関 綾（大谷大学）
大山 和哉（同志社大学）
雲岡 梓（京都産業大学）
三宅 宏幸（同志社大学）
宮本 祐規子（大阪大学）

日本近世文学会事務局代表 佐藤 至子

〒113-0033 東京都文京区本郷七-3-1

東京大学文学部国文学研究室内

メールアドレス info@kinseibungakukai.com

大会プログラム

【会場】 佛敎大学紫野キャンパス1号館

【行事】

第一日 十一月十六日(土)

委員会 (一二・三〇〇～一四・〇〇〇)

委員会会場 三階304

大会受付 (一三・三三〇)

開会 (一四・三三〇)

研究発表会 (一四・四〇〇～一七・三三〇)

研究発表会会場 三階313

1 『嵯峨天皇甘露雨』初演年次考

2 初代嵐音八の実道外―歌舞伎『由良千軒蟾兔湊』の由良太郎をめぐる―

3 山東京伝『桜姫全伝曙草紙』の手法―京伝読本の展開の中で―

4 黄表紙の長編化と敵討物の流行

懇親会 (一八・〇〇〇～二〇・〇〇〇)

懇親会会場 地下一階カフェテリア

大阪大学(院) 細川 久美子

東京大学(院) 古川 諒太

早稲田大学(院) 小林 俊輝

日本大学 伊與田 麻里江

第二日 十一月十七日(日)

大会受付(九・三〇)

シンポジウム(一〇・〇〇～一二・三〇)

シンポジウム会場 三階313

「データ駆動による研究の未来—過去から未来を照射する—」

基調報告

パネルディスカッション

版本草行書の序跋をデータベースで読む

市嶋春城の書簡コレクション解説におけるデータベース利用法

大坂学問所の蔵書データベース化における諸問題

昼休み(一二・三〇～一四・〇〇)

編集委員会 会場 三階304

研究発表会(一四・〇〇～一六・一〇)

研究発表会会場 三階313

5 大岡春卜画作『画本手鑑』出版考—書肆大津屋与右衛門と秋田屋市兵衛の絵本出版を軸に—

6 『翁草』の写本

7 大井正武『松の葉』について

閉会(一六・三〇)

第三日 十一月十八日(月)

文学実地踏査 会場にて資料を配付します。

国文学研究資料館 入口 敦志

早稲田大学 池澤 一郎

早稲田大学(非) 藤富 史花

大阪大学 宮本 祐規子

兵庫県立美術館 柏木 知子

日本女子大学 福田 安典

コメンテーター
司会

香川高等専門学校 古明地 樹

関西大学(院聴講生) 奥野 照夫

京都女子大学 大谷 俊太

研究発表要旨

『嵯峨天皇甘露雨』初演年次考

大阪大学(院) 細川 久美子

弘法大師物である近松門左衛門作の五段物時代浄瑠璃『嵯峨天皇甘露雨』は、竹本筑後掾(義太夫)が生前に語った曲を織り込んだ筑後掾追善浄瑠璃「音曲百枚笹」「外題づくし」に、「かんののあめつちをだやかに」とあることより、初演は、筑後掾が没した正徳四年(一七一四)九月一〇日以前と推定されている。

また、本作初板本(七行本)は、神津武男氏『浄瑠璃本史研究』(八木書店、二〇〇九)で新たに見出された、『正本近松全集』「近松浄瑠璃本奥書集覧」にない(91・1類)の奥書を持つ。神津氏は、『瘞静胎内拵』(正徳三年閏五月)、『娥歌かるた』もこの奥書を持つ正本が存することから、本作と『娥歌かるた』の初演を『瘞静胎内拵』初演の前後と推定する説を提示された。だが、太夫と版元の印判が押された奥書を持つのは本作のみである。

本発表では、始めに、本作は七行本刊行の初例とされる『けいせい懸物揃』(正徳二年三月、奥書は集覧(91・1・A))より前に刊行された可能性のあることを述べる。次に、本作成立の背景は早魃であり、正徳二年八月、五畿内での大風雨による大水害(摂陽奇観)より前、宝永八年の早であったことを当時の記録により指摘する。そして、本作の舅孝行の詞章、悪縁や異様な授乳の趣向、気弱な老父像等は、宝永末から正徳初め

の近松作品のそれらに近似、又は類似することを確認する。以上の事柄や本文詞章「弘仁八年丁酉・早」、外題名より、本作は宝永八年(新天皇即位につき四月二五日、正徳に改元)初演と推測する。

初代嵐音八の実道外

—歌舞伎『由良千軒蟾兔湊』の由良太郎をめぐる—

東京大学(院) 古川 諒 太

本発表では、歌舞伎『由良千軒蟾兔湊』(宝暦四年(一七五四)八月、江戸市村座)に登場する実道外の由良太郎の人物造型を、三庄太夫物の系譜と、道外形の役柄の変遷との二つの側面から分析する。それによつて、実道外とは特定のせりふや行動を通して、滑稽な場面と愁嘆や異見の場面との連続性を高める役割を担うものであることを明らかにする。

『由良千軒蟾兔湊』は、三庄太夫物の世界と浄瑠璃『恋女房染分手綱』(寛延四年(一七五二)二月、大坂竹本座)の世界とを緋い交ぜにしており、身替わりの子殺しの愁嘆場には、道外形の初代嵐音八扮する三樹太夫惣領由良太郎が、道中双六を振りながら異見事をするという、実道外の見せ場がある。

道外役の由良太郎の造形には、浄瑠璃『三庄太夫五人娘』(享保十二年(一七二七)八月、大坂竹本座)が影響している一方で、実事がかりの由良太郎の造形には、歌舞伎『女夫浪由良湊』(寛保三年(一七四三)八月、江戸河原崎座)における二代目市川海老蔵の演技が影響している可能性がある。

音八の演技は宝暦五年以後、滑稽なせりふ芸を實事に接続させるような演技が高く評価され、花実相兼の稀代の役者として扱われている。『由良千軒蟾兔湊』と同様の道中双六のせりふ芸は『染手綱初午曾我』（宝暦七年（一七五七）二月、江戸市村座）、『四海浪和太平記』（同十三年十一月、同座）にも見られ、宝暦期における道外形の一つの完成形を示していると考えられる。

山東京伝『桜姫全伝曙草紙』の手法

—京伝読本の展開の中で—

早稲田大学（院） 小林 俊 輝

山東京伝の読本『桜姫全伝曙草紙』（文化二年）は、曲亭馬琴『近世物之本江戸作者部類』で「大く時好に称かひひて雅俗俱に佳妙」とされ、中村幸彦氏『桜姫伝と曙草紙』など先行研究でも評価されている。本発表ではそれらを踏まえて『曙草紙』の構造を再分析し、作品単独の緻密な構成だけでなく、京伝読本の全体の流れの中でも重要な救済描写との関わりを論じる。

第一に、作中の話を舞台となる鷺尾家の内と外に分け、それぞれの中心人物である弥陀二郎と野分の方に焦点を置く。両者は鷺尾家の内外を跨ぐ存在であり、互いの不在を補い合うように殆ど全ての章段に登場して物語を覆っている。このことから、本作の構造がこの二人を軸に支えられていることを示す。

第二に、弥陀二郎や野分の方、玉琴のように複数の主要人物が善と悪の両方の性質を持ち、善から悪へ、または悪から善へ

と作中で変質することに着目する。そして、彼らを含む作中人物の大半が最終的に仏教的な救いを得ており、これは京伝の読本作品を追うことに強まる悪側の人物を含めた救済描写への萌芽であることを指摘する。そこから、『曙草紙』の「引用書目」に並ぶ『法然上人行状絵詞』などの作品を元に、京伝の勧善懲悪観と、救済するための根拠としたものについて言及する。

以上より、『曙草紙』は、作品単独の完成度だけでなく、後続作へと繋がる京伝の読本構築の手法と勧善懲悪の描き方を理解する上でも評価に値する作品であることを明らかにする。

黄表紙の長編化と敵討物の流行

日本大学 伊與田 麻里江

黄表紙が合巻へと移行する過程で、黄表紙の長編化という現象が起きたことはよく知られている。本発表では、黄表紙長編化の要因とその背景について再検討する。

従来、黄表紙は、筋が複雑で、分量が高む敵討物の流行に伴って長編化したとされてきた。しかし、享和二年刊『虚空太郎武者修行咄』・『虚空太郎舎弟仇討』（嵯満人作、和泉屋板）のように、敵討物が長編化し始めた時期の作品は、敵討と他の話材を組み合わせた形で分量が増加している。つまり、長編化は自ずとではなく、それを目指したためになされたと推測される。

黄表紙長編化の端緒として注目されるのが、長編抄録物黄表紙の存在である。寛政期に多数刊行されたこれらの作品は、寛政四年刊『純友勢入船』・『将門冠初雪』（蘭徳齋作、秩父屋板）、

寛政五年刊『銘正夢楊柳一腰』・『登阪宝山道』（馬琴作、鶴屋板）等、前後（初続）編で書名を変える様式で出版され、これは長編敵討物黄表紙にも受け継がれる。また、前掲馬琴作品のように、敵討物流行との関連が見込まれる。活東子『戯作外題鑑』が記すごとく、抄録物黄表紙の刊行が相次いだのは、出版統制によつて時事的な内容を扱うことが憚られたためと考えられる。

以上を踏まえ、黄表紙長編化を推し進めた書肆たちの思惑を考察する。新たなジャンルを生み出す原動力となつた書肆の試み（特に販売の手法）を、より具体的に提示する。

大岡春卜画作『画本手鑑』出版考

—書肆大津屋与右衛門と秋田屋市兵衛の絵本出版を軸に—

香川高等専門学校 古明地 樹

本発表では、大坂の書肆である大津屋与右衛門と秋田屋市兵衛による絵本出版活動を分析し、出版文化的側面から上方絵本流行期における、大岡春卜画『画本手鑑』の位置づけを試みる。大岡春卜は、上方における絵本出版流行の初期に、和製画譜の基礎を築いた絵師の一人である。その初の画譜である『画本手鑑』（享保五年刊）は、大坂の書肆、大津屋与右衛門が出版した。その後『和漢名画苑』（寛延三年刊）、『画史会要』（宝暦四年刊）と併せ三部作を形成し、近世画譜の基盤構築に影響した。美術史的観点に基づく研究では、和漢の絵画史を図入りで総覧する構成や、当代の絵師を掲載する新規性が評価される。

発表者は、これら画譜の出版過程を改めて検討し、『画本手鑑』が秋田屋市兵衛による求板後に抄録改題されたこと、抄録改題本と並行して『画本手鑑』としても出版が継続されたこと、先述した三部作が求板後の構想であること等、求板を行った秋田屋による出版方法上の改変を多く見出した。

この意味を問い、大津屋と秋田屋の絵本出版活動について、類板訴訟や周辺の絵本群を用いて分析し、この改変が、鳥羽絵を始めとする略筆画の画譜を軸に絵本出版を行う大津屋と、名画掲載を軸とする秋田屋の差異に由来すると推定した。これより発表者は、両書肆が『画本手鑑』の異なる特徴にそれぞれ価値を見出し、自身の絵本出版活動の中に位置つけたと結論付け、上方絵本に数多く認められる求板に関わる事例の一つを示す。

『翁草』の写本

関西大学（院聴講生） 奥野照夫

『翁草』は自筆本の存在が確認されていなかったもので、転写本（以下写本で統一）、それも主に明治38年刊の活字本である『校訂翁草』（池辺義象編）を中心に読まれ、研究されてきた。先行研究では『異本翁草』と流布本という形で論じられ（宗政五十緒氏）たが、自筆本その物、あるいは写本の研究は行われてこなかった。

このたび武蔵野市入江家蔵の自筆本を検証、『翁草』の実像が明らかになり、又、数ある写本の比較、分類、分析が可能になった。今回十四種の写本を調査した結果、自筆本に忠実な写

本群と文政十二年梅居（榎居）という人物が写した写本を祖本とする写本群に分けられ、更に入江家本系の写本は自筆本の製作過程に合わせ作られた未完成系写本と、完成後の自筆本に忠実に作られた自筆本系写本とに分けられる事が判った。後者は京都学歴彩館本他三種で、自筆本と殆ど相違が無い。

前者は秋田県図書館本他二種、完成後の自筆本とは巻の構成順序が異なるが、『塵泥』への繋がりが判る。

梅居本系の写本は関西大藏本他六種で、自筆本との違いがある。『校訂翁草』は五車楼本や鉄斎本（いずれも未発見）を祖本としているが、これらの写本も梅居系の写本と思われる。

大井正武『松の葉』について

京都女子大学 大谷 俊 太

『松の葉』なる歌書（永青文庫並びに国文学研究資料館所蔵）を紹介する。著者は江戸中期の武蔵品川住の大井正武なる人物。その序に曰く「歌は、（中略）いやしきも仰ぎ知るべき道なれ共、人の入りかぬる故、手引きの為に、天満の御心にまかせて、いにしへよりの違ひある事をあらため、あしきを直し、よきを拾ひて、十五巻に書き、猶自らが家の集と弟子の歌を終りに書き添へ、十八巻になして、住吉の御心にもかなへば、松の葉と名付けて世に伝へ侍る」と。全十八巻とあるが現存は七巻のみ。そのうち六巻は、「直し歌」と称して、万葉から古今・新古今、さらに近世の公家の歌に至るまでの和歌千余首について、批判のことばを記し、みずからその改作を提示する。家持も躬恒も

定家も頼阿も実隆も一刀両断、古今集を初めとする古典和歌に手を付け改変するという所為は、従来の堂上和歌の立場からすれば、面期的である。その直されたところにこそ和歌ならではの表現が籠められているとも言えるが、正武はわかりやすく筋の通る歌に単純化するのである。

不詳の作者、大井正武について、本書中の家集部分一卷と、宝暦十年古今伝受竟宴御会の和歌を同じく「直し」た、正武の他の著作一冊をたよりに、その人物像・和歌観を確認しつつ、正武による評語と改作歌の具体的検討を通して、本書の和歌史的意義について考える。

シンポジウム概要

データ駆動による研究の未来

——過去から未来を照射する——

基調報告

国文学研究資料館 入口 敦 志

「データ駆動 data driven」と言うが、なにか目新しいことのように感じられるが、文献に依拠する文学や歴史学の研究では、遠い過去からすぐに行われてきたことである。大量のテキストを集積した「叢書」が編纂された時、それを効率的に利活用し、駆動するための「類書」が構想されたことは必然であったと言える。今後膨大な電子データの蓄積が予想される中、それらを

どう駆動していくか。その課題について、過去の例を参照しながら考えてみたい。

パネルディスカッション

版本章行書の序跋をデータベースで読む

早稲田大学 池澤 一郎

個人での研究においても、授業の中での資料提示や研究会での共同研究においても、草行書で書かれた漢詩文の序跋の翻字鑑賞には、画像データをフルに活用するのが常である。今回は特に絵画資料に付随する題画文学の解説に効果を挙げうる例として、河村文鳳の『帝都雅景一覽』と『文鳳山水画譜』の版画とそれに付随する頼山陽の題画詩、また冒頭の序文などの解説にデータ画像をどのように活用するかを示す。山陽は右の画譜の出版書肆や版画を作成した文鳳のために、心を籠めて序文をしたため、工夫を凝らした題画詩を賦している。ここには美術史研究と文学研究の協調しうる領域が存在する。殊に今回は、正岡子規や高浜虚子の提唱で近代文学研究の重要なトピックとなっている文学と絵画とにおける「写生」の問題を再考したい。

市嶋春城の書簡コレクション解説におけるデータベース利用法

早稲田大学（非） 藤 富 史 花

近世の書簡文資料は数多残されているが、断片的な内容で

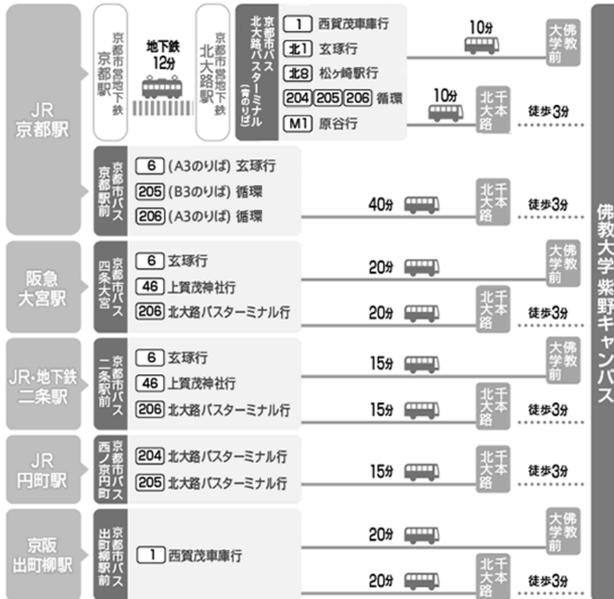
あったり、草書体の候文の解説が困難であったりという理由で翻刻や語注が十分に備わらず、資料として十全には活用されていない。その中であって、書簡という自筆資料の精細な画像を、居ながらにして参照できる環境が整いつつあることの意義は大い。すでに翻刻が備わる書簡資料であっても、改めて画像と対照して読むことで、翻字の誤りに気付くことも少なくない。今回は、発表者が参加する書簡解説の研究会（早稲田大学「手紙の会」）で検討した坂上桐陰宛頼山陽書簡（早稲田大学図書館所蔵）を例に、書簡が伝記的事項や交友関係などを明らかにするための資料としてだけではなく、漢詩文などの作品を読解する上でも重要な意味を持つことを改めて提示したい。

大坂学問所の蔵書データベース化における諸問題

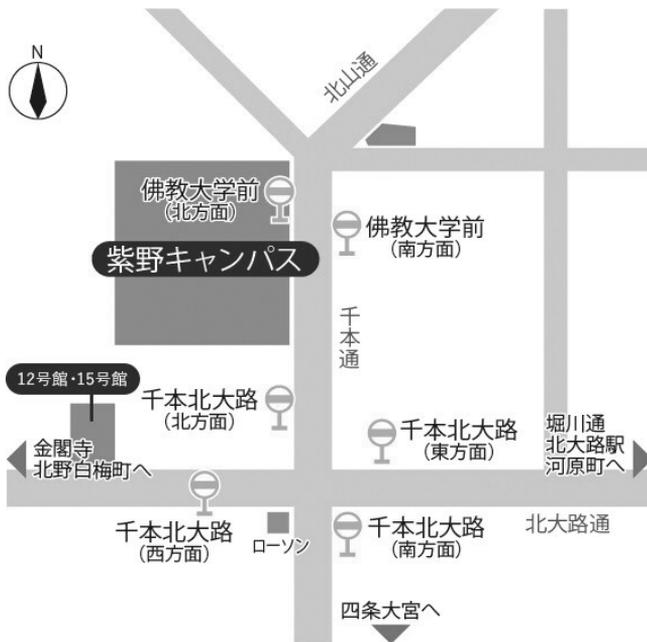
大阪大学 宮 本 祐規子

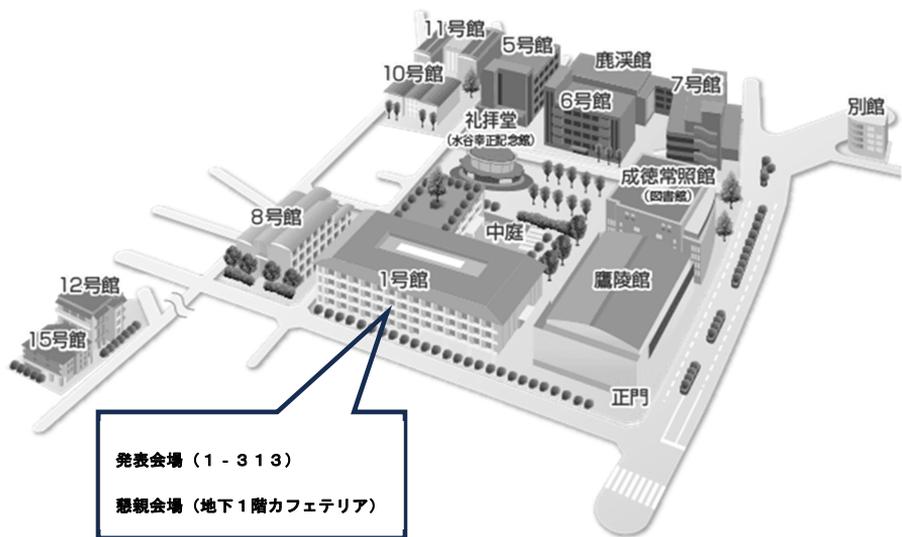
近世大坂には含翠堂、懷徳堂、適塾などの学問所があり、その蔵書は比較的まとまって大阪大学に収蔵されている。加えて、旧制高校、新制大学と体制が変化する間にも、忍頂寺文庫、赤木文庫などを蒐集してきた。ただ、それらのデータベース化にはいくつかの課題が存在しており、今後の整備が待たれる。本発表ではその整理に向けて、現状及び今後の展望について報告したい。

会場へのアクセス



京都市交通局ホームページ
<https://www.city.kyoto.lg.jp/kotsu/page/0000019770.html#2>





佛教大学紫野キャンパス全景